

## 荒川修作の無-意味な身体

—— 『意味のメカニズム』と『建築する身体』を架橋する

京都芸術大学 花房 太一

荒川修作(1936-2010)は、東京で前衛美術家として活動したあと1961年からニューヨークを拠点に、パートナーのマドリン・ギンズ(1941-2014)とともに世界的に活躍したアーティストである。荒川の作品について個別の研究は国内・国外問わず多数あるものの、その全体像はいまだ漠然としたままである。その理由として、渡米直後から1980年代までのコンセプチュアルな平面作品と、1990年代以降の建築作品が、一人のアーティストとしては分裂しているように見える点が挙げられる。

本発表では、荒川とマドリン・ギンズによって著された『意味のメカニズム』(ドイツ語初版1971年)と『建築する身体』(英語初版2002年)を比較検討し、両者を架橋することによって、荒川修作というアーティストの分裂を縫合し、全体像を描くための契機を掴むことを目的とする。

さて、『意味のメカニズム』はローレンス・アロウェイが序文を書き、ヴェルナー・ハイゼンベルクが絶賛したという伝説も相まって、難解な書物と認識されている。しかし、「意味のメカニズム」シリーズの平面作品を個別に見れば、実のところ単純で「分かりやすい」作品だ。たとえば、キャンバス上に引かれた直線の下に”USE THIS”と書かれている。それ自体はとても「分かりやすい」。しかし、再度その作品が何を意味しているのかと問われれば、答えに窮することになる。あえて言語化すれば、それは無-意味なのだ。つまり、『意味のメカニズム』とは意味の発生を問いながら、無-意味を提示する作品だったのだ。そのため、多くの論者がウイトゲンシュタインやドゥルーズを引いてこの作品群を分析してきた。

ウイトゲンシュタインが行為に向かったように、そしてドゥルーズが出来事に向かったように、荒川とギンズは建築的身体に向かった。しかし、彼らの特徴は、「私たちの種のメンバーの死が永遠に予定に入らないなら」という仮定を置いたことにある。すなわち、天命反転である。奇抜に見える提案だが、『建築する身体』を『意味のメカニズム』から直接的に派生した著作だと理解するなら、それは無-意味を、固定された意味へ還元することなく、無-意味なまま持続させるための挑戦だったと考えることができるようになるのではないか。実は、「意味のメカニズム」シリーズとして制作された作品群には、すでに観賞者の参加が促されていた。つまり、意味を発生させると同時に無-意味に至るには、身体への介入が必要とされていたのだ。おそらく身体こそが無-意味の本体である。そして、身体の使用を方向づけることで身体とその周りの環境を変革しうる。その企てが成功したか否かを判断することは本発表の目的ではないが、2つの著書を架橋することで、アーティストとしての荒川修作の一貫した態度を知ることができるに違いない。